

昭和51年5月9日第三種郵便物認可（毎月1回1日発行）昭和51年8月1日発行 通巻57号

ヒマラヤ

HIMALAYA

1976年8月号



日本ヒマラヤ山岳協会——HAJ

HIMALAYAN ASSOCIATION OF JAPAN

H A J ヒマラヤ集會

〈東京定例集會〉———（無料）———

毎月第4金曜日 18時30～20時・HAJ東京事務所。毎月第1金曜日は、自由集會です。ヒマラヤに関する個人的な相談、ご友人との打合せなどにHAJ東京事務所をご利用下さい。なお、毎週金、土の13時～20時まで事務所はご利用できます。

8月は休み

9月3日（第4金曜日、24日は休み）ガルワル山麓

10月22日 ネパール・トレッキング情報

11月26日 アッサム、ビルマ、ダージリンの話

12月3日（第4金曜日、24日は休み）

ネパールの旅、トレッキングのガイド

HAJの「ネパールへの旅」(600円)の本持参のこと

52年1月28日 アフガニスタンの山(ワハン隊速報)

2月25日 中央アジアの山々

3月25日 インド・ヒマラヤ情報

〈北海道定例集會〉——— お茶代・実費———

毎月第1月曜日 18時頃から、札幌市北1西4棟向 喫茶「ねむの木」の3階特別室でおこないます。奇数月定例、偶数月自由集會

問合せ先 大崎正信理事

〈名古屋定例集會〉———（無料）———

毎月第二金曜日 18時30分～20時エア・インディア名駅前 ホテルニューナゴヤ 747号（7階）

8月は休み

9月10日 ガルワル山麓の旅

アッサムの近況

9月18～19「ヒマラヤ山荘開所式」小登山

10月は休み

11月12日 アッサム、ビルマ、ダージリンの話

12月10日 ネパールの旅のアドバイス

HAJの「ネパールへの旅」(600円)の本持参

52年1月21日（第3金曜、14日を変更）

アフガニスタンの山（ワハン隊速報）

2月18日（第3金曜、11日を変更）中央アジア

3月11日 インド・ヒマラヤ速報

〈秋のヒマラヤ集會〉—申込はHAJ名古屋へ

10月9日～11日 2泊3日

ところ：長野県諏訪郡原村

ハケ岳山麓（申込者へ案内送付）

費用：大人 9500円 小人 6500円

内容：ヒマラヤの話・映画、ハイキング、登山

ヒマラヤ 8月号目次

●HAJヒマラヤ集會	●H&S Plan のページ	11
●HAJを考える	●HAJワハン隊だより	11
●ネパールの外国人に関する規則改訂さる ...	●第6回東日本ヒマラヤ研究会開く	12
●ラダックー1ー	●読者だより——日本から、ヒマラヤから ...	12
●ブータン研究会から	●世界の尾根を行くー2ー	増田秀穂 ... 13
●関係の機関・団体その1 東洋文庫	●ヒマラヤに関する質問と回答	16
●ヒマラヤ閉話ー7ー	●ヒマラヤ学入門——その42——	17
●名古屋集會報告	●最近の映画とテレビから	19
●Expedition 研究グループ会員募集	●新刊・旧刊	20

〈創立10周年をひかえて〉

H A Jを考える——その1

はじめに

1967年10月1日、名古屋地区を中心に創立されたH A Jは、まもなく10周年を迎えようとしています。当初ひとにぎりしかなかった会員も、現在は900名近くになり、山岳に関しては国内で屈指の規模の団体に成長しました。

規模と共に活動も飛躍的に充実してきています。ヒマラヤ各地へ連続的に送られるツアー、辺境の興味ある地をめざす幾つもの踏査パーティ、毎年度実施され着実な実績を累積している高峰への遠征隊など。また、国内では、月刊機関誌の発行、各種出版活動、集会、研究会、各専門研究会の活動など多彩であります。

一方、活動量、会員の大巾な増大はそれだけ組織運営上の問題も大きくし、また、複雑な形で投げかけられてきています。

これから何回かにわたってシリーズでこれらの問題を探り出しながら、それらをどのように解決し、どのような方向にH A Jを発展させていくべきかを皆で考えて行きたいと思います。シリーズは理事の交代執筆を予定していますが、会員各位からも多くの建設的なご意見を寄せてもらいたいと思います。「皆んなのヒマラヤ」は「皆んなのH A J」から築かれるものだからです。

会員

会則第7条では、会員を分けて、○普通会員（年会費4000円、入会費2500円）、○夫婦会員（年会費二人で4000円、入会金3000円）、○親子会員（年会費二人で4000円、入会金各2500円）、○客員会員（第三人の会員に限り普通会員に準ずる）としております。

「ヒマラヤ」定期購読者を会員としており、会費は購読料に充当しています。

圧倒的部分は普通会員で800名、次いで夫婦会員80名、親子会員2名、客員会員6名、計888名が1976年3月末現在の在籍者です。

◆ 会員は全国43都道府県に拡がっております。

その状況を地図に図示してみましたのでごらん下さい。

888名の内訳は、男子739名、女子149名で男女比は87:13になっています。

地図で分るように、会員の分布はかなり偏っており、その76%余が東日本地域です。

1971年の名簿を繰ってみますと、総会員数492名のうちやはり76%が東日本で全く同じ傾向です。

約3年8ヶ月の間に会員数は1.8倍、400名近く増加しているわけで、年平均108名の新しい仲間が加わっています。地域的には東北（3.3倍）、中国（3.2倍）が著しく増え、北海道、九州では1.2～1.5倍程度です。特に東北は数名から130名となり驚異的な拡大ぶりです。東日本ヒマラヤ研究会を軸とした地域活動の盛り上げ、会員同士のコミュニケーションの良さがあづかっていると思われます。また、地域の特性もあり、切実に情報とヒマラヤへの夢の実現をH A Jに託していることが言えるようです。

一方、東京、大阪、愛知等の大都市やその周辺地域でも会員は着実に伸びています。これらの地域にあっては会員の志向は非常に多岐にわたっていて、正にH A Jらしいバラツキを示し、それが強みでもあり、また組織上の悩みももたらしています。これらに関してはいずれこのシリーズの中で詳しく取り上げられるはずなので省きます。

全国組織ではありますが、基盤は会員個々の豊かさと、その志向を組織運営上に反映させることが肝要であり、その点、地域活動を通しての相互の啓発による向上、特徴ある地域活動を組織して行くことが重要といえるでしょう。

今年度総会で決議された「一人の会員が新しく一人の会員」を増やす運動も充実した地域活動があってこそ実現されるものです。

特に地域小集会はその拠点であるだけに、全国各地に無数の小集会を組織することは極めて大切と言えます。また、会員の偏在性はある程度やむを得ないことですが、活動の質、量で余り格差を

生じないようバランスがとられるのが理想であり、この点空白地区、地域活動に支障を及ぼすような少数地区は解消される努力が必要です。

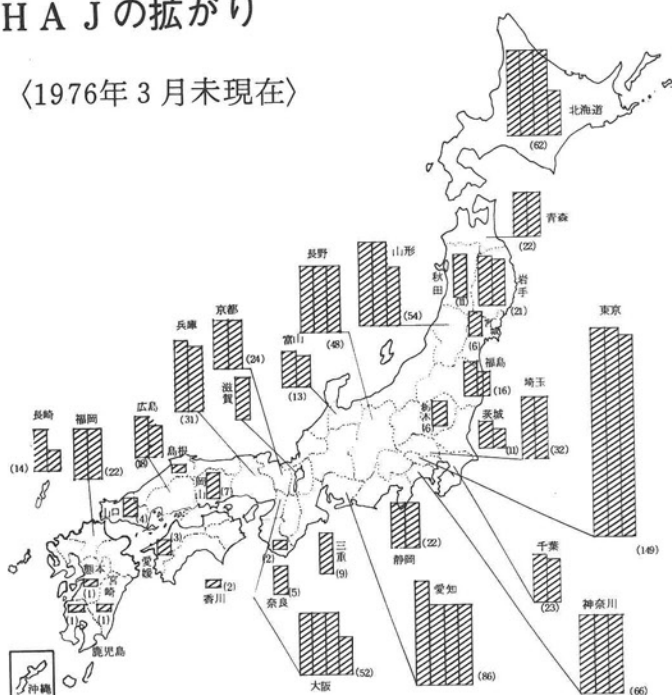
H A J 自体は一般の山岳団体に比して比較的ゆるい結合の団体であり、それがまた、多彩なグループワークや特異な個人の活動を助長しているので、ここで会員の分布、地域活動を云々するのはにつかわしくないことかも知れません。

けれど、同好の士は周辺に多くいる方が良し、多くの人が集合することにより、豊富な発想も期待されるというものです。

組織が力を増すことによって、会員に対するサービスも充実できるし、対外的にも好都合な面が多々出てきます。「一人が一人の新しい仲間を増やす運動」をぜひ共成功させたいものです。

H A J の拡がり

〈1976年3月末現在〉



少なくとも2000名の会員になれば、会の可能性は飛躍的に増大し、それは同時に“会員一人一人の可能性”を拡大することに通ずるからです。

(稲田定重——インド・東北地区担当理事)

ネパールの外国人に関する規則改訂される

B. ランジャン

(H A J ネパール理事)

ネパール政府は1958年に決められていた外国人に関する規則 (Foreigners' Regulations) を1976年4月11日に改訂した。主なところを以下に記しておくので参考にされたい。なを、正式文はネパール語でネパール官報Vol. 25, No62 に載っている。

トレッキングの定義

トレッキングとは名勝地を訪ね、いろいろな目的のために自然の美しさを眺めるために近代的な輸送手段によらないで歩く行為をいう。

ツーリストの定義

1 晩, 24時間, または数日, ネパールを商用, 職業的な目的, 勉強, 観光, 休暇, スポーツ, リクリエーション, 巡礼, 医療, 親戚の人との面会,

国際会議や会合の関係者として訪問する外国人のことをいう。

ビザの種類

(a) 外交ビザ (Diplomatic) 外交官など外交パスポートをもっている人, またはネパール政府が, 外交上必要と認めた人, およびその家族に発行される。

(b) 公式ビザ (Official)

公式パスポートを持っている外国公官の職員, 外国人アドバイザー, ネパール政府が認めたネパールに滞在するエキスパート, 国連の職員, ボランティア, およびその家族に発行される。

(c) 非観光者ビザ (Non-Tourist)

(a)(b)と次の(d)以外の外国人およびその家族に発

行される。留学生、航空会社社員、合弁会社社員、マスコミ関係者、国際結婚した女性、スチュワーズなどで、ネパール政府の許可したもの。

(d) 観光ビザ (Tourist)

観光ビザは前記ツーリストに発行される。

ビザ代

1 回限りのビザ (Single) 5.00USドル

4 回までのビザ 20.00USドル

4 回以上のビザ 30.00USドル

ビザの延長代

1 週間までは10ルピー、1 カ月までは30ルピーただし、登山隊のビザの延長代は無料。

トレッキング許可

ネパール国内をトレッキングしようとする外国人はトレッキング許可を取得しなければならない。定められた様式によって、中央出入国管理局 (Central Immigration Office 通称イミグレ) に申請しなければならない。次の条件を満たしていれば許可になる。

(a) 1 回に1 地域に限ること

(b) イミグレの示したルートによること

(c) ネパールの法律に基づいて認可されたトレッキング会社を通すこと

もちろん禁止区域は許可にならない。

トレッキング許可の延長・変更

イミグレのみが延長・変更を許可できる。

トレッキング許可代

1 週間当たり15ルピーとする。

トレッキング許可の検定

トレッキング許可に認められた地点に書いたときはその地方のイミグレでトレッキング許可の検定を受けなければならない。

トレッキング許可の解消

トレッキングを終了した外国人はイミグレでそのトレッキング許可の解消をおこなう。

ビザの取消し

次のような場合にはビザを取消される。

- (a) 国際予防注射証明書も持っていない者
- (b) 気狂い、または正常でない精神の者
- (c) 犯罪をしてネパールへ逃げこもうとする者。
- (d) 伝染病患者
- (e) ネパールの安全をおびやかすおそれのある者
- (f) 禁止区域を訪れた者

(g) トレッキング規則に従わなかった者

(h) 密輸をしようとする者など

国外追放

ビザなしで入国した者、ビザの期間が切れて滞在した者、ビザを取消された者は国外追放される。

入国地点

次の地点からビザを持った外国人は出入国できる。

(a) Kakarbhitta (Mechi 地区)

(b) Rariskiyahi (Koshi 地区)

(c) Jaleshwar (Janakpur 地区)

(d) Birganj (Narayani 地区)

(e) Sunauli (Lumbini 地区)

(f) Kakarhawa (Lumbini 地区)

(g) Tribhuvan Airport (Bagmati 地区)

(h) Kodari (Bagmati 地区)

(i) Nepalganj

(j) Koilabas (Rapti 地区)

(k) Dhangadhi (seti 地区)

(l) Mahendranagar (Mahakali 地区)

ただし、ネパール政府はネパール官報に公示してこの出入国地点を変更することがある。

外国人登録

90日以上滞在する外国人はネパール入国後15日以内に地方のイミグレまたは警察に登録しなければならない。90日以内の Non-tourist ビザで入国した者も、それを90日以上に延長したときは、延長した日から7日以内に登録しなければならない。

禁止地域への訪問

ネパール政府に許可された外国人以外は禁止区域には入域できない。

ミニ・ニューズーインド登山規則改訂さるー

1976年6月に追加された項目は (イ)ポーターの死亡または致命的な事故の場合に1000Rsを支払うこと (ロ)ハイ・アルティテュード・ポーターの死亡または致命的な事故の場合は5000Rsを支払うこと。遠征隊はこの金額を保険契約でできること。

の2つである。なお、登山料に相当する手続費は現在1000Rsだが、近く2000Rsに値上りするもようである。インド登山規則は12項目から成っているが、今回の追加を除く全文 (英文) は「ヒマラヤ」47号PP. 21~22に載せてある。

ラダ ック—1—

S. C. コウル

「Beautiful Valleys of Kashmir and Ladakh」

by Samsar Chand Koul, 1963

(P. 132~P. 142) より

ラダックはカシミール谷のようなすばらしい美しさや魅力的な景色をもってはいないが、まわりをぐるりととりまく山々の壮大な魅惑、風が吹き抜けている平原、きらきら光っている永河、とどろく急流、透明なサファイヤ色の湖、そして一風変わった文化形態は、自然を愛する人や冒険を求める者にはその荘厳な、そして、厳しい光景としてたまらないものであり、また地質学者は地表面の下に隠され、無限の宝物ともいべき鉱物を見つけることができる。

旅行者は非常な興味をもってこの地方に住む人たちのいろんなことを知りたいと思っているであろう。昔の国境で囲まれている面積は後にパキスタンによって少し除外されたが、ジャンムとカシミールを一緒にした、このめずらしい土地について詳しく話す前に簡単なアウトラインについて述べてみたいと思う。

民族と宗教

たったの80,000人ノしかしながら民族の多様化、国の習慣と文化、数種の民族語によって区別される人たち、そのどの部分でも明白な個性をもっている、というようなことを強く示しているが、一方では、それらの組合せがいいあらわすことがむずかしいような魅力とひびきのシンホニーをかなでているのである。

ラダックを訪れる人はカシミールからラダークへ入る玄関口ともいべきゾジラ峠をすぎると秀げた凹凸の多い景色が現われるが、この景色はカシミールの森林の多い丘や、みどりしたたる谷間に対して、はっとするようなコントラストを示しているし、見たことのない種族の人たちに逢うこともできる。

そこはもう多くがシア (Shia) 教派に属しているバルティ (Balti) の人の故郷である、カルギル・テシル (郡) の領域に入っているのだ。このバル

ティ人はギルギットのダードのシーナ方言を話している。ダラス地区のダード・ブロックパスとは区別しなければならない。主としてスンニ教派の習慣を公言し、ほとんど彼らの故郷からもって来た習慣を固守している。ヌルバカシ教も代表的なものとしてこのカルギル郡の人の中に見つけることができる。スンニ派のほとんどをしめるカシミール人も、主としてカルギルの街でまた、ちらほらみかけることがある。

シア派の大多数はモスレム教以外の人に触れたバターや、油のようなしめり気のある、あるいは液体状の食物のようなものは汚れたものと考えるなど、儀式的に清浄さを保つという点で非常に古い形式をもっている。カルバの殉教者をたたえる絶えることのない祭はこの人たちの主な宗教的関心事であり黒いターバンと黒い帯の“アガス”と呼ばれる宗教的リーダーの言葉はこの人たちの法律ともいべきものである。楽しくしたり、面白いことの場合のすべての形式、ゲームやスポーツでさえも規制されている。

社会活動の中で注目すべきものは1週間または短期間に限られた特定の期間の契約結婚の習慣である。このカルギル郡の村のあるところでは処女は白いズボンをはき、結婚した女は黒い色のズボンをはいている。

カルギルの約65km東北にはドルチクス (Durehiks) とガルクン (Gorkun) の村があり、これはダラス地区の回教の“グロクパス”に対してすべてが絵のような仏教の“ドクバク”の家を作っている。これらの村々はレーのテシルにあるダー (Dah) とハヌ (Hanu) の村に行政的に含まれていて、これらの村と隣あっている。ここの人たちはダラスのアーリヤン系の顔かたちをしており女性にはしばしばアーリヤン系の美しさをもった、なかなかよいかざり物をしている。外見上非常に飾りが多く、男でさえもイヤリング、ネックレス

腕環、特別なよそおいの場所には耳からの人造真珠を重そうにさげたりさえもする。男も女も、ドクパスの者はみんなその地区のすべての他の住民の民族から区別できるように血のように赤い花々に帽子を飾るとである。この人たちの故郷は果物が豊富で特にブドウが多く、ダンスをしたりよく酒を飲んだりする。

もっとも変わった点は生活を律するタブーである。例えば牛のミルクとそれから作ったものを食べないし、にわとりの肉や卵を食べない。それらの糞を燃料や肥料にも使わない。実際に牛は家畜の対称としてはほとんど考えていない。それに牛から得られたものは何でもけがらわしい物だと思っているようである。

カルガからカルギル——レー道路を約25km行くとシャーゴルの村がある。この村は道に仏教の像のある最初の村であり、ここからラマユル(Lamayura) をすぎ、レーに近づくにつれてだんだんに仏教は増加してきて、レーでは沢山見かけられるようになる。カルギルからスル谷經由で近づく易いザスカール地区は、この村を回教の人のために作りあげた24以上の村の中ではただ一つの仏教の優勢な村である。この地区の仏教徒は非常に単純で、人づれしていない、この地区の人の中ではもっとも古いしきたりをもっている。

レーの街自体もまた、チャチョット(Chhachhot) などその近隣の村もかなりのシア派とスンニ派の回教徒がいる。のこりの人は仏教徒である。レーの街自体はラダック人、チベット人、ヤルカンド人、カシミール人、パンジャブ人などのいる民族の混在している街である。そして、インドの守備隊員たちの違った民族の部落も大へん平和に協調性をもってお互に交際している。それぞれの人の宗教に対して宗教の情熱的な信心は限りない寛容によって平等にされている。この人たちの高潔さと人情深さは有名である。おどり、酒、酒盛りを愛する楽しい人たちでありカルギル郡の人たちとは完全に対称的である。一妻多夫制は法律によって禁じられているが、しかし、現実にはまだ生きている。レーの仏教徒は食事や民族間の結婚に対してタブーはもっていない。過去でも仏教徒の娘が彼女の親と他の仏教徒の知己や親族の関係なく回教徒の男性と結婚した。回教徒の夫と仏教徒の妻の間に生れた子供は、親の

間で仏教徒と回教に分けられたというケースがあった。ラマ教は宗教的生活で一緒になった独身の男と女は、仏教徒の社会では特殊なものであった。

ラダック人は瘠せてたくましく、背は高くあごにひげがないか、あっても少ない。形のいい帽子のうしろの下は首の下のえりあしまで達しており、そのはしで上にまげてある。長い毛のガウンは腰のところを帯でむすんである。彼らの信じがたい忍耐力と強い肺の力は大きな財産といえる。仏教徒女性の頭のカムリのふさは外にひろがり、はしは背中まで下っているし、輪を集めたトルコ風の首かざりは人をひきつけるのが大きい目的であり、うたがいもない魅力となっている。女性の着物の中でのもう1つの特長は男のそれになぞらえているが、ガウンの外は人工的にししゅうがされているか、さもなくば装飾のふちどりがしてある点が違っている。

ラダック人のほとんどはヤクの毛のテントに住み、羊や山羊の群が唯一の財産であり、牧草を求めてあちこちと動く、チャンタンの遊牧の民によって成り立っているということである。彼らが住んでいる地域は4300mより高いところである。パシュミイナという良い毛を生ずる山羊は低いところには繁栄しないのである。彼らは近代文明の影響に全く触れていない原始的な人たちである。

気候と風土

パキスタンに入っている地方を除外すればラダックは93,300平方km(36,000平方マイル)の面積があり、レーのテシイルだけでその約1/4位(29,848平方マイル)ある。東はチベットに囲まれ西はカシミールとなっている。北緯度33°と35°の間にあり東経75°30'と79°の間にある。そして、標高は海拔2800~4300mである。レーとカルギルの町はそれぞれ3521mと2590mである。気候は非常に寒くそして暑いという特長がある。年間の降雨量はレーで約75ミリ、カルギルではもう少し多い。晴天の太陽光線の射るような強度のために空気中の湿気は非常に少ない。しかし、雲が太陽をおおえば夏の日であっても、ただちに湿度がだしぬけに下りはじめる。だから冷い天候、特に高処では寒くて乾燥し、そしてかみそりの刃のようにぴりとした天候に対して準備しておかねばならない。午後には一般的にいて風が吹き出す。こ

く少ないとざされた地区、すなわちダラスはアジアで2番目に寒く、谷の降雪は乏しく、しかし、山の外では非常に多いというようにいわれている。夏の最中でさえ、高い山の峠には雪のかたまりが残っていて晴れた日には雪のまぶしさは大そう強いので、目をゴーグルで保護しなければ旅行者は雪盲のひどい状態にかかり易い。

ローカル・ポーターや馬方は、峠に雪が深く積っている場合、山越えすることができる唯一の動物、“ヤク”の脇腹からウールのかたまりをちぎり、それを眼にあてゴーグルのかわりにもちいる。外部の山々は積雪が多く、ラダックへ通ずる峠は一年のうち5～7か月開くのがやっとなのである。この地方への旅行する一番よい月は6月から10月でありインドからの旅行者は次のようなルートで入ることができる。

1. Kulu — Leh 2. Suru — Leh
3. Srinagar — Zojila 経由 Leh

これらのルートの最初のもは標高3960mから5330mの間にある4つの出岳境界の峠によって区切られている。極端にむつかしいルートである。2番目のルートはザガル・ノール峠(4570m)ボタコル(4570m)ムスコル(4270m)を通りカルギル郡のスルに達する。このルートは最初のもののように難かしくはないがあまりとられない。そして、3番目のゾジ・ラ・ルートによるものより容易ではない。

ゾジ・ラの峠は標高3505mでラダックの畳壁になっている山の一番低いギャップである。ゾジ・ラのあとでさらに2つの峠ナムク・ラ(3960m)とフォテ・ラ(4054m)をこえてレーに達するが、これらの2つは容易に越えることができるし、年中通ることができる。約280kmあるこのルートには毎日の泊り場にレスト・ハウスがある。馬やポーターや食糧はどこでも得られる。ジープの道はすでにレーとカルギルの間に建設されており、軍のジープが夏にはこれらの駅の間を定期的に往復している。容易に1日で旅を終えることができる。夏には旅行者のためにソナマルグとスリナガールの間には公営のバスがある。レーとカルギルの途中のカルギル、ダラス、カルツエそしてレーには郵便局と電報局がある。カルツエを経由して夏の月の間、連絡のための季節電話局がある。冬にはMachoiに移転する。ダラスとカルギルとレーに

は政府の診療所がある。(注：スリナガル＝レー間は1969年より定期バスが通っている。レー＝マナリ間にも自動車道路があるが一般人は通行できない。)したがって、インドからの旅行者は特に冒険しようという気がないなら必ずゾジ・ラ・ルートをとるべきである。冒険的なことを考えるならSuru ルートをとる必要がある。Bhotakol 峠は氷河があり、堅そうで割れ易いクレパスが点在するので前に旅行者が雪崩で犠牲になったこともあり留意すべきである。この氷河を越すときは細心の注意と慎重さを忘れてはならない。

——ブータン研究会から——

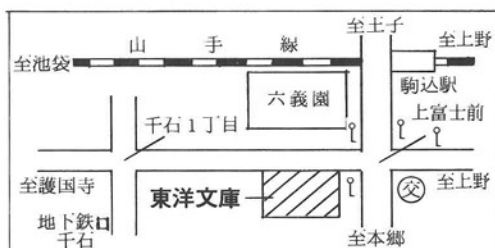
一昨年ブータン初入国し貴重な体験を得た訳ですがその後無為の日が経過し今日になってしまいました。

もとより残学菲才の上、田舎にひっこんでおりますと新しい情報も入らず困りますが同行だった冲常務理事を始め関係者の皆さんの御助力を得たいと希っております。

昨秋ブータン・ネパール観光団の一員として親娘で参加された京都市の秋山合道先生(新日本書道会々長)と先日飲諾の機を得楽しいひとときを過しました。ティンブーのホテルで丁度訪中のアポロ14号のアームストロング船長と交歓及び国技である弓技大会の模様また私が世話になったガイドもあり、たいへん懐しがっていた等々興味深い話ばかり。

御馳走になった上“いく曲り、いく曲りする山の道、パロへの道は遠くはるけし”とチョモラリの色紙を頂戴し次の再会を約して退出した次第。

(矢野 郁雄)



財団法人 東洋文庫
東京都文京区本駒込

〈関係の機関・団体〉その1 東 洋 文 庫

＝アジア研究資料の世界的宝庫＝

特 色

東洋文庫は日本におけるアジア研究のセンターであることを目標としています。

東洋学研究の資料センターとしての東洋文庫には、中国のほか、日本、朝鮮、満州、蒙古、シベリア、中央アジア、チベット、西アジア、エジプト、インド、東南アジア等アジア全域に関するものが集められており、蒐集の全体が一つの貴重な文化財であるといえます。アジア研究に関するこれほど纏ったコレクションは日本のみならず世界にも比類がありません。これら貴重な資料は、すべて公開され、貴重本を除いては複写の求めにも応じています。

東洋学の研究センターとしての東洋文庫は民間研究機関として自由な立場から内外の研究機関、専門家と協力し、一大学、一研究所の枠を越えた各種の総合的な共同研究や国際的協力事業を行っています。東洋文庫研究部は、同時に広く日本の学者の研究業績を出版することをその仕事のひとつとしています。

沿 革

東洋文庫は、1917年（大正6年）故岩崎久弥氏が、中華民国総統府顧問ジョージ・アーネスト・モリソン氏（1862～1920年）の蔵書を購入して設けられた東洋学の専門図書館です。

モリソン氏は、ロンドン・タイムズの通信員として中国に駐在し、1912年には、中華民国総統府政治顧問となって活躍していました。氏は、職業上の必要と生来の蒐集癖とから、中国に関する欧文の書籍を網羅的に集め、北京の自宅に書庫を建てて希望者に閲覧させていましたので、モリソン文庫の名は世界の中国研究者の間に知られ、これが他に譲渡されると知れた時は、欧米の大学・研究所が争って購入を希望しました。

モリソン氏の蒐集は、中国に関する限り完璧に近かったのですが、アジアのその他の地域については、極めて不十分でした。そこでこれを購入し

た岩崎氏は、蒐集の範囲をアジア全域に拡大して、欧文の書籍ばかりでなく、漢籍その他研究の基本になるべき現地諸語の図書を網羅し、1924年（大正13年）、現在地に財団法人東洋文庫を設立し、図書部のほかに研究部を設け、わが国最初の東洋学専門の図書館ならびに研究所が、その第一歩を踏み出すことになりました。

以来、東洋文庫は、その図書の蒐集、日本人学者の研究業績の出版、東洋学の知識の普及などを通じて、日本のみならず世界の東洋学の発展に少なからぬ貢献をして参りました。

戦後、経済事情の激変により、事業の運営に若干の困難がありましたが、1948年（昭和23年）国立国会図書館は支部東洋文庫を設けて、図書の閲覧を再開し、政府、民間及び国外から補助金が寄せられ、さらに、ユネスコの要望によって、1961年（昭和36年）東アジア文化研究センターが東洋文庫に附置され、東アジアの諸国と協力してそれら諸国の文化を広く世界に理解させる事業を推進することになりましたのは、東洋文庫の国際的活動を一層盛んにするものと申せましょう。

蔵 書

東洋文庫の蔵書は、昭和49年1月現在約60万冊でモリソン文庫を中心とする洋書、4000部を数える中国の地方志及び叢書、800種を越える中国の族譜、清朝刊行の満蒙文書籍、各種のチベット蔵経やその他のチベット語図書、岩崎文庫を主とする和漢書、アラビア語・トルコ語・ペルシア語資料、マイクロフィルム約300万巻を所蔵しています。この中には多くのコレクションが含まれ、国宝や重要文化財の指定を受けているものも少くありません。

活 動

閲覧 研究図書館として所蔵文献・資料を公開しています。

閲覧時間 午前9時～午後4時30分(12時～12時30分昼休のため閉室)

休館日 日曜、祝日、木曜日の午後、毎月の末日(日曜・祝日に当たるときはその前日)創立記念日(11月19日)年末年始。

研究情報活動 東洋学研究所の国内及び国際的情報の連絡に当り、また、日本国内の研究成果を「欧文紀要」等によって広く海外に紹介しています。

研究業績・資料の刊行 東洋学に関する優れた研究業績でありながら、一般出版社からの刊行の困難なものを出版し、また重要な典籍資料の複製をおこなっています。

講演会 東洋学の専門知識の普及のために、春秋二期に「東洋学講座」を公開しています。また海外の優れた東洋学者が来日した時は、臨時に特別講演会を開催することもあります。(聴講無料)

春期東洋学講座 5・6月ごろ(火曜日 午後6時～8時)

秋期東洋学講座 10・11月ごろ(火曜日 午後6～8時)

展示会 普及活動の一つとして、毎年一回、東洋文庫所蔵の稀覯書や専門書の展示会を開催し、その解説目録を発行しています。(観覧無料)

被写 マイクロフィルム及び電子複写による方法で文庫所蔵資料の複写に応じています。なお海外や地方に在住の方のためには、郵便による申込にも応じています。

出版物

- A 東洋文庫論叢 東洋学に関する研究で学界に大いに貢献するところがあると認められたものを選択して刊行したもの。昭和48年度現在55部出版。
- B 東洋文庫欧文紀要(Memoirs of the Research Department of the Toyo Bunko)。年刊。わが国の東洋学の水準を広く欧米学界に紹介し、相互の学術交流に資すため、日本語で発表された論文の中から優れたものを選択し欧文に訳して、世界各国に送っています。昭和48年度現在No31まで刊行。

- C 東洋文庫叢刊 内外の稀覯典籍で、年とともに顔色または滅失するおそれが大きく、しかも東洋学に益するところの大きいと認められるものを複製刊行したもの。昭和48年度現在24部刊行。
- D 東洋文庫欧文論叢 昭和48年度現在5部刊行。
- E 東洋文庫諸目録その他刊行物 東洋文庫蔵書分類目録類。昭和48年度現在74部刊行。
- F 東洋文庫蔵重要文献複製刊行物 一般研究者に入手困難な重要学術文献を複製刊行したもの。昭和48年度現在、次のものを企画し、22部を刊行。
- a. 東洋文庫刊行物のうち絶版になったもの。
 - b. 東洋文庫蔵欧米人の日本語研究書。
 - c. チベット語文献の複製(Bibliotheca Tibetica)
 - d. その他。
- G 東洋文庫各種研究委員会刊行物 東洋文庫研究部には必要に応じて、いくつかの研究委員会が組織され、共同研究の推進に当たっていますが、近代中国研究委員会、敦煌文献研究委員会、宋史提要編纂委員会をはじめ、各種委員会から刊行した文献目録および索引類は昭和48年度現在で84部に及んでいます。
- H 東洋文庫附置ユネスコ東アジア文化研究センター刊行物 日本を含めた東アジア諸国における文化研究の現状の紹介と研究成果を英文で順次刊行しつつあります。
- a. 機関誌(East Asian Cultural Studies)。昭和48年現在度Vol.14まで刊行。
 - b. 研究動向、研究者一覧、研究機関一覧。日本、タイ、フィリピン、韓国、台湾、香港、カンボジア、ラオス、マレーシア、シンガポール、南ベトナムの各編を刊行したもの。昭和48年度現在8部刊行。
 - c. 非専門家対象の東アジア文化に関する誌物、東アジア諸国の一流の学者の手による解説書。昭和48年度現在15部刊行。
 - d. 文献目録。昭和48年度現在5部刊行。
 - e. 専門家対象の研究書。昭和48年度現在4部刊行。

ヒマラヤのノーマンクレチュア

水 野 勉

ヒマラヤという名の由来については、深田久弥氏が「ヒマラヤの高峰」の「ブロード・ピーク」の項でふれているが、1920年代にすでにヘディンがこのことにふれているのを知ったので、一応まとめて書いておきたいと思う。

ヨーロッパ人がHimalaya という名で、このアジアの中心部に横たわる巨大な山脈を呼ぶようになったのはそれ程古いことではない。このことは深田氏もかいているが、ここではもっと以前にはどう呼んでいたかをたどってみたい。

この山脈の一部に対して、種々に与えられた名を組織的に整理したのは、アブラハム・オルテリウスである。1556?という約 400年前にかれはすでにこの仕事をしている。古典的な名称パロパミスという名を用いた多くの人びとをあげている。また Tavrvs. Caucasus, Imaus についてもそれぞれ整理した。最後のイマウスに対しては、新しい名として、M. Dalangver および M. Naugracot という名を提案した。

オリテリウス以後、50~60年間は、古典名、新しい名が、多くの地図にいろいろと現われている。1654年、ダベヴィルは Mont de Caucase, Dalanguer Mont, キルヒニアは1667年に Caucasus mons, Montes Tebatici, Belor Mons を掲げている。1680年のフィッシャーの地図上には、キルフィアの Montes Tebetici とともに、新しい呼名 Serenager Montes が古典的な Naugracut とともにみられる。1705年のデリスルの地図では、Naugracut は古めかしくなりはじめたとみえ、ヒマラヤは M. de Pubet あるいは M. de Naugracut と呼ばれた。1年後に、デリスルはその地図上に M. Hendonkech という名を紹介している。1723年になると、同人は Mont Ima Montagne de Negracut をヒマラヤに当て、その東部には Mont Tangi あるいは Tangour (Langur?) という名を付けた。かれはまた Mont Tanla あるいは Otuntao という名を知っている。1730年、ストラーレンベルクは Me-ndukesh および Mus Tagk 別名 Imaus Mons を記している。1733年

のダンビルの地図には、ヒマラヤ地域の中に、Rimola MM., Tchomla MM., Oumoula MM. などの名がみられる。それらは Himala と少し似ている。1788年のレンネルの地図には Gomaun Mountains, Sewalik Mountains および Mountains covered with Snow and Ice などがみられる。1801年のアロースミスは Himalah Mountains with Snow をし、1804年には Himmaleh Mountains を記している。そして、1812年のモアクロフトの地図では、Hináchal Mountains に変った。1821年になると、アレキサンダー・ジエラルドが Chain of the Hither Himalaya covered with perpetual snow と綴った。すなわち、はじめて、Himalaya と書かれたのである。フランシス・ハミルトンはこの2年前に Himadra or Himaliya Mountais the Emodus of the Ancients と書いている。1824年にラビーは Himalaya. 1831年にフンボルトは Himálaya, 1835年にベルクハウスは Himalaya と書いて、この頃になってようやく Himalaya に落着いて、これ以後はこの綴りが地図に用いられるようになったのである。例外として、1840年に、サー、ウィリヤム・ロイド少佐が Himalaya の代りに Himala という形を用いたけれども。

この Himalaya という名はすでに古代インドの叙事詩の中で知られていたけれども、この山地を横断したヨーロッパの宣教師たちは、この名を聞かなかったようであるし、したがって言及もしていないのである。

名古屋集会報告

5月11日、18時30~20時、於：エア・インディア〈話題〉1. インドヒマラヤ登山隊最近の話題(沖)④通関が厳しくなったので保諱状による通関か、関税を払う通関かなどをはっきり決め、それに対応した準備、手続を早目にすること。
⑤ 無線機の持込は輸入許可と開局許可が必要であり、少なくとも3カ月前より手続を開始すること、Form は I F M などでもらえる。

⑥ピザの件は微妙な問題があるのでエキスパートに相談にのってもら方がよい。

⑦登山許可の取得は目的の山を決めて早く申請することが必要。インナーライン上の山は特に時間がかかり、しかも不許可になり、別の山を再申請ということになるのでよほど早くから手続を始めしておくこと。

などなど、インドヒマラヤへの実務的なことを中心に話し合った。

2. 今後の山行、集会の打合せなどをおこなった。

(出席者) 岩水竜峰, 久保幸治, 松本香代子, 沢田睦子, 折戸正明, 上田竹三, 豊田好子, 水野治朗, 増田秀穂, 榊井照和, 山田正弘, 沖允人, 立命館大OB (敬称略) (O)

Expedition 研究グループ＝会員募集

H A J Expedition 研究会 (略称、遠征研) は72年に結成され、以後真剣な研究及び実践活動を重ねてきました。このたび将来に向けて更に活動を強化するために組織改編を行ない、また新会員を募ることになりました。遠征の実践とそのための研究を志す方々の積極的な結集を期待しております。

○ 実績

① 遠征の実践

- a. 1974年ラムジュン・ヒマール (6983m)
- b. 1975年日印合同カシミール・ヒマラヤ (ヌン, 7135m) 遠征
- c. 1975年ガルワール・ヒマラヤ遠征 (リシ・パハール6992m, サーフ・ミナール6911m, バムチュー6303m)

② 出版

- a. 年報「Expedition I」
- b. 機関誌「Expedition News」No28まで発行, 隔月刊6～12ページ。

③ 研究会, 合宿, 集会

- a. 年次研究会 (毎年1回, 2～3日) b. 年次総会, c. 技術交流合宿 (年1～3回)
- d. 小集会 (随時) e. その他遠征実施に伴う研究会, 準備活動等。

○ 性格

この会はEXP研そのものを基盤としてExpedition を行なおうとする者の集団である。したがって、他組織でもってExpedition を行なうための情報収集や研修の場ではなく、またExpedition の実践を抜きにした、単なる研究の場でもない。いわんや社交 (サロン) の場として存在するものではない。このような目的、期待をもってこのグループに入ることや、Expedition 実現の

意欲なくして在籍することは認められない。(Expedition News No27より)

○ 会員としての義務

規約はないが、会員として守るべき最低の義務 (メンバーミニマム) を次のように設けている。

普遍的なメンバーシップ以外に、このグループの特性と組織の維持のために最低守られるべき基準であり、これをガイド・ラインとしてメンバーたる資格を問うことにする。

- a. 会費の指定期日までの納入 (年額5,000円, 入会金は無い) b. Exp 基金の積立て (後注)
- c. 年次総会, 研究会への出席 d. H A J 活動への積極的参画 e. 事務局からの要請に対しての適切な処理。

○ Expedition 基金

会員の遠征参加に備えること、組織強化のために基金規程を設け運営している。年額3万円で、個人名義で積立てられる。

○ 遠征計画

7000m峰及び8000m峰への中期的計画を樹立し、具体的な研究, 渉外, 準備に入っている。

H A J 15周年記念事業「H & S Plan」の一部としても位置づけられる。

○ 出版事業計画

本年度中に下記のものを出版する。

- a. ラムジュン・ヒマール登山隊報告
- b. 日印合同カシミール・ヒマラヤ遠征報告
- c. ガルワール・ヒマラヤ遠征報告
- d. 年報「Expedition II」

ミーティング。のち一同そろって酸ヶ湯温泉へ、混浴。

5月3日 午前中 有田、脇田、林、松田、下山快晴、佐藤、村山、松館B. C南 1,500m～登行、スキーで帰幕

午後 全員下山。途中、薦の湯温泉入湯、十和田湖方面へドライブ、村上、

八戸から帰途～

5月4日 佐藤八戸から帰途～

各分担の通り準備を進行することを確認、6月中旬国内費の集金、6月27日東京集合、荷造り等を確認しました。(佐藤優記)

編集者注：その後同隊は7月1日北京経由でカプール着。7月中旬ワハンへ出発予定。詳細次号で

〈速報〉 第6回東日本ヒマラヤ研究会開く

はじめて関東で開催された研究会には、HAJ内外から95名が参加し、非常に充実した内容であった。本年は「インド・ヒマラヤ会議」と呼ぶのがふさわしかったようで、全日程インド・ヒマラヤに割かれた。スライド、映画による各隊の報告、我国最初のヒマラヤ登山であるナンダ・コットの竹節作太氏による記念講演、インド・ヒマラヤの総合パネル討議、その他、いづれももっと時間がほしく感じられた。なお、内容の詳細については次号で報告したい。地元栃木の会員の方々の御苦勞に心から御礼申しあげたい。

〈読者だより〉 日本からヒマラヤから

本多夏生 様他 長崎

5月7日から12日まで長崎市の万屋町コクラギャラリーで「日赤長崎原爆病院ヒマラヤ・トレッキング・パーティ」のヒマラヤ写真展を開きました。テレビ番組にも一部が紹介され盛況でした。

(皆様のような催しはできるだけ「ヒマラヤ」誌上でPRしますので、早目に原稿を事務局まで送って下さい。切は毎月5日(翌月15日発行)です。ぜひご連絡下さい、HAJ)

黒沢文代 様(東京理事)

5月のビスタリー・クラブ(ヒマラヤの旅同窓会のようなもの)は犬山で開きましたが、今回は山を抜いてしまいましたが、次からは伊豆あたりで開こうかと考えています。毎回30名位ですが、新しい参加者が増えれば名古屋を脱出して東で会合をもつのも容易と思います。(ビスタリー・クラブは年1回の楽しい集まりです。毎年5月頃に山里寿画伯を囲んでのヒマラヤを語る会です。次回参加希望者は係の黒沢さんまで連絡して下さい。

荒木健次 様 桑名市

3月に小須田義治氏のネパール写真展が東京で開かれましたが、友人の話によると大変すばらし

かった由ですので、ぜひ中部地区でも開いて下さい。(開催のためには会場の手配と若干のお金がかかります。秋のヒマラヤ集会に、若干を展示してもらおうよう交渉してみます。HAJ)

R. シェトラー 西ドイツ Hattorfam Harz

1 去年はラダックで沖・空さんにお世話になりました。昨年も再びラダックへ入りました。私は自動車オリエント、北アフリカ10,000kmを計画しています。

ランジャン理事 ネパール

〈Expedition Agent として登録〉

私のExpress Trekking (P) Ltd. はネパール外務省、および Nepal Mountaineering Association より Expedition Agent として公認されております。新規則によって、正式登録会社でないとシエルパーなどのあっせんはできないことになりましたが、私の会社は承認になっていますので、せいぜいご利用下さい。

1976年プレ・モンスーンには、ローツェ隊(サーダー、アン・ツェリン)、マカルー隊(チェコ)(サーダー、アン・テンバ)、ラムジュン隊(高知県)(サーダー、ミンマ・テンジン)そして通関、登山手続はもちろんすべてアレンジしました。この他に数名をリストアップしています。

世界の屋根を行く——〈2〉

増田秀穂

カルギルからレーヘ

再びカルギルに戻り翌朝3時半に起きバスに荷物をつむ。インドのバスは大体どの地方でもそうであるが1人20kgまでは無料である。荷物は全部バスの屋根の上に積み上げる。ここからレーまで240kmあり途中難所が幾つもあるので4時頃全部出発する。我々も例外ではない。約1時間位走るとムルベクの村に着く。ここはラマ数のゴンパ（お寺）があり、その近くの大きな岩には15mもある仏像がきざまれている。16世紀にチベットの王、シンゲ・ナムギャルが彫ったといわれている。これから先はラマ教の色がだんだんと濃くなりタルチョー（経文を書いたのぼり）が家々の屋根にたくさん立ててある。

やがて行く手にナムク・ラ（空の柱という意味）が見えてくる。標高4,000mの岩の峠である。完全なドライエリヤとなり草木はほとんどなくあたりに全くの岩山で赤、紫、茶、黄色と、実にいろいろな色をしている。道はうねうねと蛇行して登って行く。前を行くトラックは真黒い煙を吐きながらものすごい音を出して登っている。途中何箇所もトラックの休憩所が作ってある。とても一気に登れる道ではない。やがてレーへの道の最高地点ファト・ラ(4,094m)に着く。峠には石を積み指導標のような役目を果たすように作られたチョルテンが立っている。

岩山のゴンパ

この峠から風景はますますドライになり、山は低くなるが砂まじりの索漠とした何か月の世界を思わせる人間の住んでいるとは思われないような荒涼とした世界になる。

このあたりも先年の印パ戦争の折、パキスタン軍が侵入してきたところである。2年ほど前軍用機がこの峠の左手の山に衝突し大破した。その残骸が茶色の山に白く散乱し、妙に生々しい感じである。

山の角を大きく曲ると急に右手が広くなり山々

の色も黄色っぽく変る。そして谷の左側にニョキ、ニョキと立っているラマ寺が現われた。幾重にも積み重なり、屋根の角々にタルチョーがはためく様はまさに異様の一言でしか表現できない。ラマユルというところである。右側の谷は約1,000mほど下にあり、目のくらみそうな高度差である。そして行く手は大きく幾つにも山腹が崩れて谷へせり出している。浸食されたものらしい。そのスケールは息をのむ大きさである。このような風景が1km以上も続く。

やがて下りが始まった。時速5km位でしか走れない一番の難所で大きくカーブしながら下って行く。17のカーブ、いずれもするどいヘアピン・カーブでしかも高度差がきつい。すぐ下を行くトラックの屋根が見え、上を見ると追ってくる車のシャシがのぞけるほどである。続くトラックはゆっくり、ゆっくり人の歩くほどのスピードで下っているので私達のジープは次々と前の車に追いつき、追い越さなければならない。そのたびにじっと車を道路の端にギリギリまで寄せるのでスリル万点、わきの下から油汗がでる。1時間ほどの下りで川のところまで来た、ここがスリナガル、レー間の一番低いところだという。それにしても2957mある。柳の木が川のそばに数本はえており2〜3軒の家がある。

インダス川を上る

すぐに大きい川に出合う、黒っぽいねずみ色の水は次から次へと追っかけるように激しく流れている。インダス川であった。インダス川はずっと北上しパキスタンに入ってスカルド、ギルギットをへて流れていく長大なものである。インダス川の流れを見下すようにマニ石が積んである。マニ石というのはラマ教の人が旅の安全を祈って経文をきざんだ石である。ずっと長く続いているものはマニ・ウォール（マニ壁）と呼ばれている。このインダス川のマニ・ウォールは5km位もずっと

続いており、その石の数はおびただしいものである。何年かかって積みあげたのかかわらないが、これらのマニ石はこのインダス川沿いの道がいかに危険が多くきびしい道であったかを物語っている。自動車道は昔の道をそのまま走っている、そこにしか道は作りようがないのである。両側とも岩山で5000mを越してそそり立っていて文字通り草木は一本もない。川の水は岩をかみ、どす黒いドロ水で細かい砂と土とでありとても飲用水にはならない。自動車のラジエターにもならない。このあたりの村の人は遠くの谷から水をくんで使っている。岩山の間からの水はきれいなものもあるが、いつもあり、いつもすんでいるとは限らない、谷間の水は清らかという私達日本人のイメージとはおおよそかけはなれている。

レーに到着、

広々とした風景になる、道はインダス川をはるかに下に見下す山の斜面についている。ずっと下の川沿いに人の歩くだけの道が1本糸のように続いており、所要所にチョルテンが立っている。村人が3〜4人連立ちゾッパというヤクに荷をつけて歩いているのが点々になって見える、“チベット”を歩くという感じである。

道はインダス川から離れた谷に入っていく。標高は3600mほどであり、広々としてくる。はるかむこうに点々と村があるレーとその周辺の村である。道は直線的に走りぐんぐんと村に近づく、やがて軍の大きな基地があり飛行場も見えてくる。レーの基地である。飛行機だとインド平原のチャンデガールから1時間で着く。しかし、一般の人は乗ることはできない。

レーの町

レーは標高3500mほどのチベット高原にある山岳都市で人口は2万人程である。附近にある100あまりの村の人口、それに1970年頃から増えたチベットからの難民を加えると10万人位になる。人々はほとんどラマ教を信じておりチョルランやカンニの数はおびただしいものでいたる所にあり軍事基地の中にまでもある。町の中心はバザールでかつてはヤルカンド方面のシルクロードを通してチベットからも物質が運ばれそれらの商品を並べた多くの店でにぎわったところである。今でもそ

のままの道がバザールとして使われており、両側の建物は日用品雑貨を中心にチベット風の食道や、郵便局、電報局、銀行などがある。そして道の上には村の人が野菜を並べて売っており実に、にぎやかである。ほんの1000mほどであるからゆっくり歩いても15分とはかからないが店の品物はともかく行き来している村の人が興味深い。ラダックトッピーといわれるシルクハットのような帽子をかぶり、着物のような前を合せる長いガウンを女も男も着ている。そして女はさらにその上に肩かけのようなボックというものをかけている。品物は豊富で日本製の電池なども売っている。ここはインドの東の国シッキムなどとともに密輸者の多いところでインドのポリスも住民のさわぐのをおそれてか取り締りもきびしくないそうである。従って、日本製、中国製の品物が出まわっており堂々と売られている、こんなヒマラヤの奥地で日本製のチューインガムや電池を見るのは何とも取り合せがチグハグである。

裏通りはまがりくねって迷路のようになっている。家は日乾レンガを積んで作ったものだが2階建、3階建、あるものは6階建のものもありそれが不規則に続いているのでどこか切れ目が分らないような家ばかりである。さらに裏へ入ると通称チャン通りと呼ばれているチャン（大麦で作ったドブロックのような酒）を飲ませる店が何軒か並んでいる。ご多分にもれず酒と女はつきもので、ここにも何人かの売春婦がいるそうである。人々は生れてから死ぬまでほとんど風呂に入らないのでその汚さは想像にあまる。とてもそばに近寄れないほどであるから売春婦をためしてみるには相当の覚悟がいる。チャンは作って2日ほどしたものが一番うまく甘っぱくてビールより少しアルコール度が弱い。日中でも飲んで人が多い。極度に乾燥しているのでいつも体に水分をたくわえておかないと弱ってしまう。ハンカチなど30分でカラカラに乾いてしまうほどである。

ラマ教

ラマ教の特徴は、宗教活動の重要な部分は僧侶が行い、一般信者は説教も聞かないし、個人的祈りも行わない、これは、僧侶以外は知的能力の段階が低くいまだにみかけ上の真理から脱出できないため自分の行為の結果が来世において良くなる

ことを期待するだけである。したがって一般信者は、寺院や貧しい人に布施を行い神仏の前に燈明をあげたり、巡礼をしてラマに加護や呪文を願ったりして福德を積んで行くことが来世において良くなることである。善か悪かを行うことによって天神、阿修羅、人間、動物、餓えた亡霊、地獄の生きものの六つのいづれかに生れかわるという六道輪廻がある。

ラマ教は芸術的にもすぐれ、仏像の鑄造、彫刻、タンカ（仏画）等の製作技術が非常に発達している。寺院の壁にある仏画は人々に見せて教義を講釈したり、祭礼の装飾用に使う。これらの仏画はラマ教の教義に由来する多面、多足、多臂また、男女神の合体せるものなど奇怪なものが多い。また、絵の中央に描かれた人物の背景にある花や雲などは、多くの歌と詩の源泉となった自然や動物への愛情の表現である。

レーには12のゴンパがあり古いものには1000年以前に建てられたものもあり、大きなゴンパはラマ僧も100人以上もいる。6才位からラマ僧の修業を行い1人前になるには20年以上かかるという。レーの町はづれにはラマ僧の学校もある。昔は一家から子供を必ず1人ラマ僧にしたという。ラマ教には黄帽派と赤帽派があり前者の方が戒律が厳しく、酒、肉、結婚をしないそうである。

世界一の山岳道路

親切だったレーの人々に別れを告げ私達は世界一標高の高い山岳道路でレーからマナリに向けて出発する。レーからインダス川の上流に向って約40km走るとウブシに着く。このままさらに100kmほど進むと中印国境の最前線へ到達する。もちろん一般者にこれから先は不可能である。このため軍の強力なチェックポストがありすべての車が厳重にチェックされる。私達はこの先でインダス川を渡り右方へ行くのだがチェックポストが分岐点の手前にあるため、まぬがれるわけにはいかない。チェックポストの兵隊に必要な書類を提出し許可を求めるがダメだという。理由は車の登録が軍へしてないことによる。一同レーをいさんで出発した手前もありおめおめ戻る訳にはいかない。運転手も請けの大きい仕事であり同じ気持ちであろう。我々は彼等に交渉をまかせ少し離れた所で見守る。兵隊がさかんにレーへ電話をかけている。時間は

どんどん経過する、これから先の道路状態も解らないし気持はあせるが持つよりしかたがない。3時間位経過してからようやくOKの返事がでる。兵隊は先程の厳しい表情をやわらげゲートを開けてくれた。インダス川に別れを告げ谷間をしばらく進むと突然ジープが故障する。昨日、運転手にジープの整備をしておくように念をおしておいたのだが……。

私達はレーからマナリまで約500kmを走破するのにジープ（レーではジュンが、タクシーと呼ばれている）をチャーターした。料金は1kmにつき2.5ルピー（約100円）である。片道しか乗車しなくても帰りはお客がないので復路の料金も加算される。また無人地帯で標高も5000mを越えるので2台使用する。したがってチャーター代は2日間で20万円である。少し高いがやむを得ない。

故障は30分もすると修理でき谷川に沿ってゆるい坂道を登って行く。赤、紫、茶、黄色の岩山が夕陽に照らされてファンタジックな世界をかもしている。やがてジープは前方の雪山を目指して一気に登りはじめる。対向車もなくエンジンの唸りだけが響いている。高度はどんどん上り道端に雪が現われるようになる。高度計は4800mを指している。先程見えていた雪山の頂上もいつしか暗闇に消えライトに野ウサギがうかびあがる。

タグラン・ラの峠

ようやくダグラン・ラ（5424m）に19時着く、世界一高い山岳道路の峠である、雪をふみしめ真暗な峠の上に立つとタルチョーのバタバタとはためく音が何か神の言葉のように聞えてくる。峠の右側には避難小屋があり内部には神がまつられている。宿泊も可能であったが、ジープのラジエーターの水が凍るのを心配して下ることにする。道路は山を廻るような感じでゆるやかに下っている。途中軍の建築中の宿舎があったのでそこに泊る。建物はしっかりしているが窓にガラスがなく吹きさらしである。水場はさがしても見つからず持っていた2ℓの水を8人で分けて飲む。夕食は玉子焼とビスケットというわびしいものであった。高度は4800mである。寒さにふるえながらねむる。

ヒマラヤに関する質問と解答

〈問〉カシミール内で使われている主な言語は何でしょうか。

〈答〉カシミールの北部、スリナガールを中心とした地域はウルドゥ語とそれによく似たカシミーリー語が使われています。南部のジャンム周辺はヒンディ語です。キシトワール地区はカシミーリーとよく似た方言が使われています。ラダックがらズカールにかけてはチベット語系のラダック語が話し、書かれています。もちろん教育を受けた人は英語とヒンディ語を話します。従ってカシミール州の北東の山岳地やラダックに入ればそれぞれの土地の言葉が話されている訳です。英語の他にもう一つということならウルドゥ語を勉強されるのがよいと思います。さらに余力があればチベット語ということでしょう。いずれにしてもこれらの言葉を本格的に勉強するならともかく、登山のポーターとご愛嬌程度の会話をお望みなら現地へ行ってからガイドにでもおそわってカードにでも書いて使うというくらいで充分と思います。それよりもまずちゃんとした英語を理解できるようにした方がよいと思います。

〈問〉スリナガールはイスラム教徒の町ということですが、カシミールはほとんどがそうでしょうか。

〈答〉スリナガールは90%ほどがイスラム教徒だといわれていますが、カシミール州全体では60%位になります。インド全体の20%ほどから比較するとカシミール州としてはイスラム教徒が多く、それもスリナガール周辺にかたまっているといえます。旅行者には直接の影響のあるのはイスラム教徒の熱心なポーター達が日に5回メッカに祈ることと、金曜日が礼拝のため休みになってしまうことが多い、などですからあまり困ることはありません。特に短期間の旅なら全くといっていいほど影響されません。

積極的に宗教の世界に入っていくというなら、それ相当の準備や知識をもっていないとトラブルのもとになると思います。

〈問〉インドにトランシーバーを持ち込みたいのですが。手続が難しいようですが……。

〈答〉インドはネパールと違ってトランシーバー

の使用許可は大変時間がかかります。申請後、3カ月はかかると思っておくほうがよいでしょう。しかも、輸入許可もとらなければなりませんのでどうしても1日以上ニューデリーに滞在する必要があります。無許可で持込むと、もし、使用しているところを見つかるスパイの疑いがかけられるだけでなく、密輸入にもなりますので、大変なことになると思います。それでも、といわれるなら、各自の責任で持込まれることとなりますが…。

従って持込むなら早目に申請して正式に持込むことです。便法はありません。小登山ならあまり無理してトランシーバーを持込むことはやめて、タクティックスを工夫されるのもよいかと思えます。トランシーバーでこき使われる登山をやめて、自分の責任と判断で登る本来の山登りをやってみるのも悪くないという考え方もあります。

イスラム教を理解するための入門書としては淡交社「世界の宗教」5「啓示と実践・イスラム」吉田光邦著が手ごろでしょう。なお、スリナガールのイスラム教徒はほとんどがコーランに重きをおく正統派といわれるスンニー派です。

〈問〉カシミールのハラムク登山などの場合、帰路の車は手配しておくことは必要でしょうか。

〈答〉カシミールの場合、車道の終点になる村には電話や無線がないのが普通です。従って、下山してきても電話のある村まで歩かないとタクシーを呼ぶことはできません。呼び寄せられるタクシーはスリナガールにしかないと思っておく方がよいです。しかも、インドの電話は故障が多く、通じないこともあります。また、せっかく通じて、相手が英語が分らなかったりすると、話が伝わりません。しかも、直通ダイヤルというようなものはありませんので2～3時間、ひどいときには1日も2日も待ってやっと通じるということもあります。従って、最悪の場合スリナガール、または、よく車の通る道まで歩くつもりでいるならともかく、早く街へ帰りたいたなら、帰路の車を予約しておく方が得策です。人数が多ければ2日にわたって予約しておき、おくれそうなら、とにかく1～2名の先発が先に下山して第1便で帰って第2便を少しおくらせることもよいでしょう。ま

た、全員が早く下山したら第1便のタクシーにたのんで、すぐに第2便をこさせるということもできます。こんな場合のためには第1便は早い時期にチャーターしておけばよいでしょう。その他、隊の行動とにらみ合せてうまい方法を考えておくとういと思います。

予約した場合、車のNo.運転手の名前、前渡金の受取、会社の名前、住所、電話などをメモしておくことが必要です。前渡金は普通ガソリン代位（200kmで100Rs位）です。

また、もし、下山がおくれてもそのまま待っていてもらいたいこともよくいっておくことです。このようなときこそ車が必要なのですから。その場合、1泊待たせて50～100Rs位でしょう。

余程のことがない限り約束を破ることはありません。筆者の経験ではおくれてくることもほとんどありませんでした。しかし、万一車の故障や道路の不便といったこともありますので、半日待っても来なければ歩いて下山の方がベターです。そのためにあらかじめどこまで下れば車が呼べるか、または泊まれるかしらべておくことも必要です。

とにかく、途中で予定を変更して早く下山しても、車を簡単に呼ぶことはできません。（期間中ずっとチャーターしておけば別ですが）アクシデントの場合も同様です。とにかく日本のようにスムーズに行かないことは覚悟しておかれた方がよいでしょう。

〈問〉カシミールの5000m峰の登頂に登攀用具はどんなものが必要でしょうか。

〈答〉ラダック、ザスカール山郡の難峰を除いて、カシミールの既登峰の一般ルートは夏の長次郎谷や三ノ窓の雪渓やハッ峰、あるいは、穂高の縦走路、5月の岳沢や潤沢の雪の斜面位の程度と考えておけばよいでしょう。従って確保用のハーケン類と下降時のためのすてなわとピンにするスノーバー位を用意してメインザイルは9m/m位で充分ですが（悪場ではダブルで使う）少なくとも40以上、できれば80mの方が、ルートの長いヒマラヤの山では有効です。氷河の上ではつけっぱなしのことが多いので11m/mのような太いものは重くて疲れます。長いザイルは下降のとき極めて有効です。ザイルなしでも下れますが帰路は疲れているし、何かの事故でもあれば心配ですから。短期間の登山の場合、ほとんどサブザックの行動にな

るでしょうからフィックスザイルは不要と思います。フィックス工作は手間がかかるし、絶対安全とはいえません。もし、技術的に不安定な人を登らせるためならば、むしろ、前後を優秀な人でアンザイレンスすべきでしょう。

落石やクレバスの移動も多いのが普通ですから、5000m位の山なら4000m～4500mの間に中継キャンプを1つ作って一気にアタックする方が安全率も高いでしょう。ルート工作やフィックス工作をしている間に時間切れというパーティが多いものです。

ただし、高度障害のひどい人は至急に2500m以下におろす方が安全です。技術的なことよりも、高高度に耐えられるか、そして高高度で体力と気力があるかが成功のカギといってもよいでしょう。

〈問〉カシミールの小登山の場合ガイド、ポーターへの準備の用意は必要でしょうか。

〈答〉ユマールなど特殊な登攀用具を使わせる場合を除いては不要です。通常のキャラバンや登山に必要な装備はそれぞれに用意させることができ、それはお金で支払えます。

ただネパールのように山に登るガイドはほとんどいませんので、せいぜいBCまでの通訳と道案内と思っておく方がよいでしょう。ハイポーターなどという気のきいた者はおりませんので、ポーター、ガイドとも道のあるBCまでと考えておかれる方がよいでしょう。

登山局のインストラクターは一般の人のガイドはしません。

雪が多いところをポーターに歩かせる場合があればサングラス（安物でよい）を用意しておくくらいでしょう。



鈴鹿山系の最高峰御池兵頂上、HAJ名古屋第1回山行

ヒマラヤの国の取締法規など

「十人十色」とよく言われるように、旅行に関しても同じことである。訪れる国によってその国の独特の法律が適用されるわけです。ここでは各種取締法規について述べて見ます。これからインド、ネパール方面に行かれる方、再度訪れる方も一読下さい。

(1) 麻薬類の取締まり

ヨーロッパの若者がインドやネパールに流れてくる1つの目的にこの麻薬がある事は決って過言ではないと思う。日本人旅行者が所持していた「正露丸」と「七福」をイタリア警察から麻薬と間違われ、1ヶ月以上も留置場に入れられていた事件を記憶されている方も少なくないでしょう。薬を所持する時には、別の容器に移さず、英文の効能書があるならばつけておく方が無難である。

(東南アジア)

当局は麻薬類吸飲者をどしどし摘発逮捕しており、取締まりが厳重である。密告により警察が麻薬を発見したホテルの一室に、たまたま泊った邦人が嫌疑をかけられ、迷惑したこともある。したがって見知らぬ人から書信や小包などの託送依頼をうけるのは危険である。

(インド)

麻薬類の取扱いとは各国によって異なっているが、国内持込み、国外持出しはインド関税法で禁止されている。ハイジャック防止のため空港で行われているボディ・チェックで大麻を所持していることを出発直前に発見され、出発延期のうえ裁判所の即決裁判により、罰金を課されたことがある。

(ネパール)

以前は麻薬(ハッシシ、ガンジャなど)の栽培、販売が野放しであったが、現在は麻薬の栽培、販売はもとより吸飲も禁止されており、当局の取締まりはかなり厳しくなっている。

(2) 文化財および鳥獣の羽毛、皮革などの持出し制限

日本人の日本の遺跡、像などの各種文化財に愛着の念や民族の誇りを考えれば、各国民とも同じ気持ちでありましょう。多くの国では文化財な

どの売買・国外持出しなどについて厳しく規制している。韓国やインドなど一定の文化財についてはいっさい国外持出しを禁止している国が少なくない。古美術品や骨とう品を買い求める時には、持帰ることが可能かどうか、しかるべき筋にたずねることが必要でしょう。

(タイ)

仏像などの持出しは原則として禁止されているが、一部のものについては芸術局の許可があれば持出し可能である。

(インド)

100年以上古い骨董品類はすべて国外持出しを禁止されている。文化財的な物を購入した時はその際渡される領収書を出国時まで携帯する必要がある。

(ネパール)

100年以上古い文化財、古美術品の海外搬出、輸出には国立美術館において教育省考古局の鑑定をうけ、輸出許可証を取消し、出口時税関で呈示することを要するが、製作年の明らかでない古美術を鑑定をうけずに搬出しようとしたため、税関で没収されるというトラブルが時々起こっている。また虎の毛皮、サイの角、ジャ香などの持出しにも許可を必要とする。

(アフガニスタン)

次の文化財の持出しは禁止されているので、これらに該当する可能性のある物は、カブール博物館で鑑定をうける必要がある。

- (イ) 考古学的発掘・発見にかかわる品。
- (ロ) 史跡・考古学的発掘場所から出された品。
- (ハ) 50年以上の歴史を有する美術品。
- (ニ) 稀覯図書(手書きの古書など)貨幣。
- (ホ) 史的重要物。
- (ヘ) 民俗学上の品。

また骨董品(古い鉄砲・ピストル、刀など)の特出しにも同博物館の持出し許可証がなければ、出国時に没収される。

最近の映画とテレビから

映画デルス・ウザーラ

たしかに70mm画面一つ一つと音響は緻密にできていた。黒沢明監督のこり性がある。その割にストーリーの連続する劇映画としては、名場面スチール写真をつなげたようないわば全篇、予告フィルムのだ。またデルスの出現から死までを無理に完結させたためか筋の展開が荒い。だが、デルスを演じた地元人、マキシム・ムンズクは、原作以上にデルスをこなした、日本のマタギを連想する。

現地ロケの魅力の一つに密林地帯があったが、森林内部での野営風景が主であり、一シーンだけいよいよ尾根からの「アラビアのロレンス」の大ふかん映写をするのかと息をのんだら、レンズはスッと山麓に行く別動隊に移ってしまい肩すかしをくった。昔も今もシベリアの情景はこのフィルム以上だろう。デルスらの先住民族の人生と生活ぶりは少ししかとれていない。これも合作ではなくてソ連映画であった理由によると解釈できる。

それでも、公害と自然破壊、人間不信の世界からは自然人デルスと都会人アルセーニエフとの交流に的をしばった成功作となる。アカデミー外国語映画賞受賞時の黒沢監督の言葉も自然破壊……と言っている。しかしながらこの作品が黒沢的映画からはずれた原因はそんなところにある。自然賛歌はこの作品の部分であって全体ではなく、主演2人の演ずる善人同士のしかも終始きれいな関係へは、黒沢のどろどろした情念界が始めから接近方法をミスしたのではないかと私は思う。どうだろうか。（受賞したために東京では再上映する）この映画は昨年8月6日東京で、同日午後、ヨット映画「タブ」を見た。グレゴリー・ベック製作。5年をかけての世界一周紀行が原因。テーマはヨットそのものより寄港地の美しさとラブロマンス。無寄港世界一周なんて商業映画になりようがない。ところで「ヨットの冒険」中公新書には、ドイツ人はグループ活動好きのため少人数の長期航海は気質的に向かないのでは、とある。そこで、ヒマラヤのドイツ人は一体なんだろう。

（アカデミー長編記録映画賞には三浦雄一郎の「エベレストを滑降した男・カナダ製作」が受賞）

テレビジョンのヒマラヤ登山

はっきりしていないがヒマラヤ登山番組には、画面のみでなく解説の声質にまで定型パターンがあり、これにひたった番組は欠点のある登山もまったく逆にしあげてしまうようだ。この点は多分に登山行程中心の記録の本と同じである。

TV製作者は遭難事故や隊にとっての負の要因を自己のヒマラヤ登山イメージをもちたてるために扱いかねない。そうなれば視聴者がTVの強力な同化力にもとづいて受取る登山は、登山者側の現実とはおよそかけはなれてしまう。あるいはまた、記者に登山を直接取材させているにもかかわらず登山結果以上に事実にはまった記事を新聞は提供してきたらうか。

非登山者（視聴者側）のもつ登山感は決して固定したままでないはずだが、局側の番組感では、旅や秘境物の延長あるいは青年意識解明の一手段として（1月15日NHK総合TV「ジャーニー」はそうに聞く）あるいは政治宗教、国威発揚のため（1975年10月19日中国エベレスト隊日本テレビ）などにありまだまだ登山そのものに興味はなさそうだ。そんな中でさきごろあった2本の放送（東京地方）中、「クワンデに立つ」（日ネ合同隊3月27日12チャンネル）は従来の筋書だったが、「11人の頂上」（カモシカ同人隊3月14日TBS）は少し違った。

後者は登山自体の快適な成功もあってか、はかりにぶらさがってはしゃぐ男女の隊員を最終シーンにするなど全体の印象を登山をエンジョイする若者にまとめていた。前者は日ネ両隊員の交友とネパール人初登山にあおられてか悲そうな30分だった。楽しい登山が固まるしい登山よりも一層実際のヒマラヤに近いとは思わないが、放映姿勢に若干の変化が出現したようだ。

よく、ドキュメントフィルムが編集される過程でフィクション化することがある。山場ばかり見せようとする日常性（現実性）にあふれた場面をけずってしまうからだ。“ユーコンを下る”（75年7月8日第12チャンネル）はそんな時の違和感が無かった。

新刊・旧刊

Himalayas (World's Wild Places) by Nicolson, N. 3,960円
Time-Life International 1975

Himalaya- Abenteuer: Durch Pakistan zu den Achttausenden in Karakorum- Himalaya by Herrligkoffer 1975
(Passavia) 4560円

Everest 74: Le rendez-vous de ciel. Photographies de Pierre Tairraz by Mollier, C. Collection l'Aventure vécue (Flammarion) 1975 3150円

アサヒギャラリ 1976 Spring
平山郁夫全特集 1500円 朝日新聞社
シルクロードを画いてその造型の世界を広げている画家、平山郁夫の特集。「平山芸術の源流」「涅槃図」「シルクロード幻想——私の製作メモ」「シルクロードから正倉院へ」など。カラー71点、モノクロ65点 他。

アレキサンダーの道 井上靖(文)
平山郁夫 (画)
文芸春秋 1976年4月 3600円
アフガニスタン、イラン、トルコとアジアの古代遺跡の旅を通じての2人の眼に映った事物を美しく画文集にまとめたもの。

東アジアの古代文化 (季刊) 大和書房
東アジアを学術的に研究している人の季刊誌。51年4月に第8号が出た。

海外旅行術 武田正実著 研究社
1976年4月 850円
著者は元JAL国際線のパーサーだった人で、

海外旅行のトラブルをどうしたら防げるか、どう処理すればよいかなど、英語の活用も含めて解説してある。

シルクロード爆走記 大宣見義夫著
朝日新聞社 昭51年4月15日 820円
250ccのオートバイに荷物を積んでインドからヨーロッパまで走り扱いたドクターの紀行。
49年2月22日から90日ほどで23,190kmを走った。

図説 探検の世界史 第10巻
秘められたアジア内陸

Nathalie Ettinger 後藤富男訳
集英社 75年11月発行 2200円

“The Heartland of Asia”の訳。シベリアからベルシャ、中央アジア、チベットと壮大なアジア内陸における探検史の集成。ラダック、チベットにおけるイエズス会士達の活躍が詳しい。イギリスとロシアの勢力争いなど、全般に大変ドラマチックにそして平易に(漢字にはルビつき)描かれている。カラー図版が豊富、英国で編まれたシリーズの訳だけに資料は豊富である。「日本人とアジア内陸」が付録にある。〔I〕

同 第4巻 世界の屋根に挑む

Geoffrey Hindley 近藤 等訳
集英社 75年8月発行 2,200円

“The Roof of the world”の訳。モンブラン登頂から現在に至るヨーロッパ・アルプスの登山史とその出来事、アフリカ、南北アメリカ大陸、ヒマラヤにおける主要な登山。わかり易く解説され、人間と山とのドラマとなっている。登山史としては大ざっぱすぎるが、概念をつかむには便利である。

他にこのシリーズで関係があるのは、第5巻「最初の探検者達」、第12巻「砂漠への挑戦」第15巻「香料と財宝を求めて」など。全18巻で完結する。〔I〕

ヒマラヤの旅はヒマラヤのヨロズ屋へ

トレッキングからエクスペディション
まで全て引き受けます。

装備貸出・シェルパ斡旋・現地食料調達
国内外輸送手配・別送貨物通関・ヒマラヤ情報……

EXPRESS TREKKING (P) LTD.

EXPRESS HOUSE

NAXAL BHAGABATI BAHAL

P. O. BOX339 KATHMANDU NEPAL

電略 GREATREK・KATHMANDU TEL. 13017

カトマンズの宿泊は EXPRESS HOUSE
をご利用ください。

家庭的なムードで宿泊代も安く気軽に泊れる宿です。
特に日本のお客様には大浴場が好評です。自炊もでき
ます。 宿泊代—1泊朝食付30RS から

※長期滞在者はご相談に応じます。

日本語でお問い合わせください

インド大陸、中近東方面へ当社独自のプランをいたしております

ツアー名

- ★シルクロード 6,000キロ
- ★ネパールとアフガニスタン
- ★砂漠の国アフガニスタンと最
後の桃源境フンザ
- ★大ペルシャとアフガニスタン

——お問い合わせは下記まで——

(株) トラベル日本

〒100 東京都千代田区有楽町2-2-1

ラクチョウビル5F 電話 (03) 572-1461

担 当——^{とのい}外池・永瀬・月候・小島

海外登山，トレッキングに傷害保険を

——海外旅行傷害保険(運動危険担保特約付)について研究しております——

タケ

岳 産 業 にご相談して下さい。ノ

あなたの所得を補償する保険をご存じですか？ (所得補償保険)

●所得補償1～5年，傷害特約60～120倍までいろいろあります

自動車・火災・レジャー (山岳保険・国内旅行・つり・ゴルフ・ヨット)・普通傷害・利益
・生産物等の私達の生活に関連した保険を取扱っています。岳産業の西田までご連絡下さい

大正海上火災 ^{タケ}
保険(株)代理店 岳 産業

大阪市淀川区西中島町5丁目第3チサン10F 6号 〒532
TEL 06 (304) 1115番

●ルスノトキ=大正海上十三営業所 304-5774

大自然の神秘と雄々しさ、 ガッツなトレッキング——ヒマラヤ

東はプータン・シツキムから、西はガルワール・ラダック、そしてカシミールへと三千キロ。実に、ヨーロッパ・アルプスの二倍です。雄大な八千メートル級の巨峰の連なるヒマラヤを自分の足で踏みしめ、自分の肌で感じるワイルドなトレッキングは、どのレジャーも及ばないスケールの大きさと心の安らぎを与えます。

ノリ・公喜

時間に追われ、人間関係のわずらわしさに悩み、たまには仕事から逃げ出したいと思っている都会のビジネスマン達。彼らにこのヒマラヤ山麓の魅力を教えてあげてください。

8000m級の巨峰が連なる大自然の景観。斜面一帯を華やかに色どる花崗の美しさ。海拔4865m、常に雪塊や氷塊をたたえているアルハルウット湖の神秘的な静けさ。すべてが彼らの求めている超現実的な世界です。ダイジリン

ヒマラヤのリゾートタウン「ダイジリン」は海拔2134mの高地にあります。インドの上流階級や外国人たちの別荘も多く、健康的な雰囲気にあふれた街。このダイジリンの南東わずか11キロの地点にあるタイガ1・ヒルから望むカンチェンジュンガ（世界第3位）やエベレストの偉観は、文字通り世界最高のもので、見る人の心に衝動にも近い感動を与えずにはおきません。

シツキム

ごく最近まで鎖国状態であったシツキムへ入境することができるようになりました。観光客のほとんどない現代の「桃源境」とはこのこと。王宮を中心にした神秘の国が、静かなたずまいを見せています。

ダイジリンからの途中にあるカリンボンの町も、長期滞在に向いた静かなリゾート。買物も楽しい思い出になるでしょう。

（註）シツキム入境の場合はインドのビザとは別に特別許可が必要で、詳しくはエア・インディアにお問い合わせください。

ガルワール・トレッキング
ガルワール地区は、デリーの北東約400キロの地点にあり、1974年7月から外国人に解禁されました。ナンタデビ（7816m）や、ガンジス川の源流近くにあるヒンズー教の聖地をたずねるトレッキングや、高山植物の宝庫「花の谷」や4000mをこす山岳湖への旅が楽しめます。



世界の35都市をネットする——

エア・インディア

東京●千代田区有楽町日比谷パークビル100 ☎214-7631

大阪●東区備後町松豊ビル751 ☎264-1781

名古屋●中村区堀内町ホテルニューナゴヤ7450 ☎581-5876

広島●鉄砲町1-20第3ウエノヤビル730 ☎28-7211